

平成 27 年(2015 年) 2 月 11 日  
SNW・SNW 東北 矢野歳和

## アンケートまとめ報告 「学生とシニアとの対話 in 東北大学 2015」

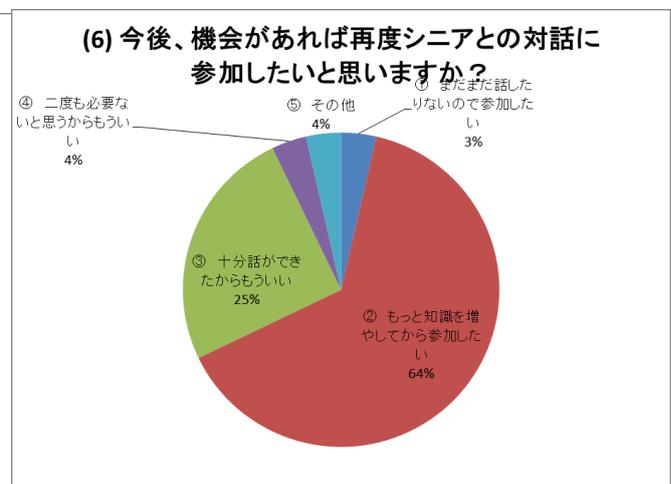
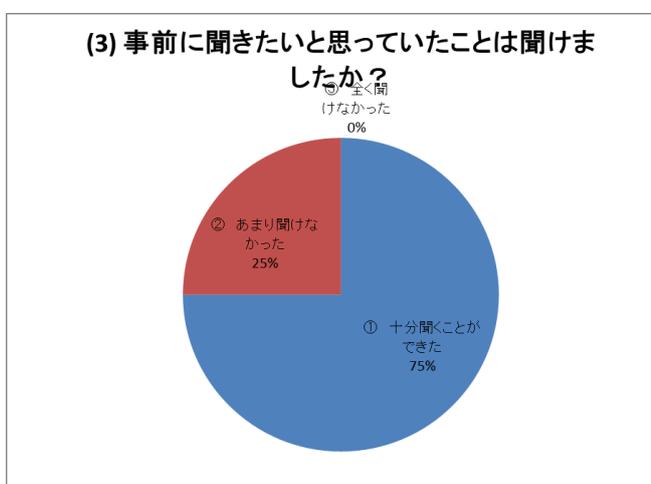
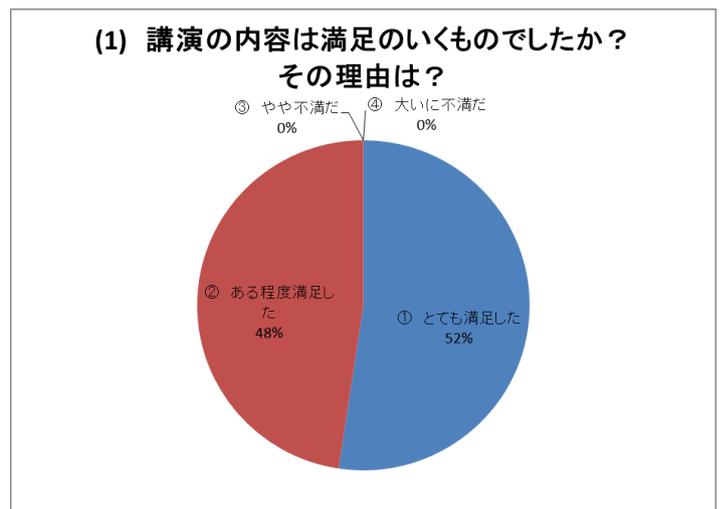
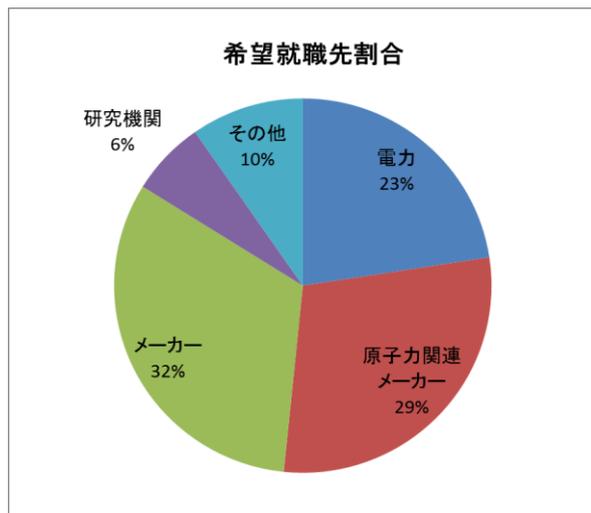
日時： 平成 27 年(2015 年) 1 月 16 日 (金) 13:00~18:00

場所： 東北大学青葉山キャンパス 量子エネルギー工学学舎

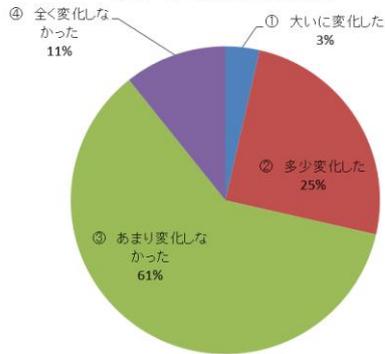
参加学生：31 名 (修士 24 名、学部 4 年 7 名) 学生幹事 DC1 佐々木幸太氏

### 1. 学生母集団

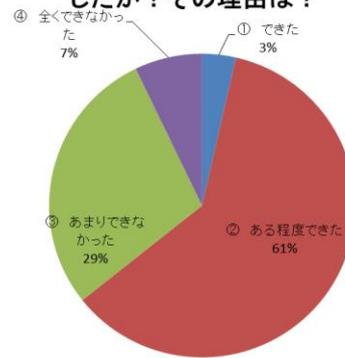
- ・修士 24 名、学部 4 年 7 名 計 31 名 回答 28 名 回答率 90%
- ・希望就職先は電力と原子力メーカーが計 52% メーカーと研究機関を加えると 90%



(8) 原子力に対するイメージに変化はありましたか？その理由は？



(10) 対話の内容から将来のイメージができましたか？その理由は？



## 2. アンケート結果

### (1) 講演の内容は満足いくものでしたか？

福島事故の内容と関連する各分野の動きや資源問題から原発の現状の課題までを系統的に知り、原子力関係者から情報を得たことを肯定的に捉えている。

### (2) 対話の内容は満足いくものでしたか？

十分満足およびある程度満足の回答が合計で 90%以上あり、対話の効果が確認できた。情報が新鮮であり、原子力業界の歴史的な流れや本音の部分、経験に基づく話が好評である。ただし反対意見が殆どなく議論が盛り上がらない部分もあった。

### (3) 事前に聞きたいと思っていたことは聞けましたか？

事前の質疑応答の準備により十分満足でき、それをもとに対話を発展できた。

### (4) 今回の対話で得られたことは何ですか？

若い人間がこれからの日本の原子力政策を引っ張る自覚が出た。今後の原子力エネルギーの重要性と取り組むべき指針を得た。原子力に対して確固たる思いを持つ人が世の中には多くいること、福島事故を乗り越えてさらなる向上を目指す意識が重要など良い点を引き出した。一方では、放射能を理解できない無知による恐怖を克服する必要との認識がある。

### (5) 「学生とシニアとの対話」の必要性についてどのように感じますか？

福島事故や日本のエネルギー事情について極めて冷静で、メーカーの視点での意見が聞け、もっと長い時間議論したいとの評価があった。量子エネルギー工学専攻の学生が将来、原子力業界で果たす役割のヒントを得るいい機会となった。シニアとの対話は大学と原子力に係わる社会との接点になる。

### (6) 今後、機会があれば再度シニアとの対話に参加したいと思いますか？

「もっと知識を増やしてから参加したい」という回答が圧倒的に多かった。これは「もっと知識をつけた状態で対話できればよかった」という積極的な回答だ

と学生幹事からコメントを頂いた。これはもっと勉強しておけば良かったとの向上心と、少し遠慮したファイト不足の両面があるが、善意に取って向上心の表れであるとしています。まじめな人ほどいつでも勉強不足を痛感するものです。

(7) エネルギー危機に対する認識に変化はありましたか？

化石燃料 4 兆円分燃やすことにこのままではだめだと再認識したこと、日本社会の風潮が世界の他国に比べエネルギーに関する興味が少なく、原子力に賛成反対だけでなくエネルギー全体で考える必要があること、原発再稼働の見通しがなくエネルギー問題が山積みであること、日本はエネルギー危機に対する認識が甘いなど問題点を学生が把握しており、原子力は必要不可欠とシニアと同じ意見だったことに安心感を示した。

(8) 原子力に対するイメージに変化はありましたか？

学生は主に原子力の専門家になるように教育されているため、イメージの変化はほとんどない。しかし、安全対策が十分行われたこと、原子力の必要性を確固と認識したことは収穫である。また原子力の学生以外や専門家以外は原子力に批判的だが、一般の方、特に企業では賛成が多いことに安心したようである。ただし専門家、政府、住民それぞれの意見があり全員が納得させるのは難しいと感じている。

(9) 今回の対話で自分の学科との関連性を見出すことができましたか？

ほとんどは関連があると回答した。一部に関連性を見いだせない例外があるのは、専攻の構成や卒論や修士論文が原子力とは直接関係がないことも考えられる。原子力を学んだものが率先してエネルギーセキュリティを考えること、ゼネラリストとしても自信が持てたなどの回答もあった。

(10) 対話の内容から将来のイメージができましたか？

ある程度将来がイメージできたとの回答が大半であった。これは学生が発展途上にあるため仕方がないが、専門の学生にこそ教育とシニアなど外部からの刺激が必要である。

どのような課題が残されているか整理できたこと、今後原子力に関わる際の敵について認識できたこと、1つは専門を持つべきであること、どのような人が必要とされているか、シニアが原子力の将来に明るいイメージを持っているなどの回答は対話の成果である。

(11) 対話の中でシニアが思う若手の役割を理解できましたか？

シニアが 40-50 年かけた仕事を未来の次の世代へバトンタッチしたい気持ちが伝わり、原子力を一般の人々に理解してもらい役割も認識できた。また自信を持って社会の一員になることを後押しできた。

(12) 自分が思っていた若手の役割とシニアの考えは違いましたか？どのような違いがありましたか？また、シニアの考えを聞くことで、自分の考えに変化はありましたか？

シニアとの対話から、多くの知識・経験に基づく話は若手とは明らかに異なこと、民間企業の最前線では原発の影響に係わることを実感し、将来観に変化があった。様々な情報の中で意見をしっかり持つことを自覚した。また、気概をもって仕事に取り組むこと、原発安全性のリスクを明示して理解を得ることなど積極的に生きることを学んだ。

(13) 本企画を通して全体の感想・意見など

原子力専攻の学生だけでなく、他の専攻にて行った方が効果ありとの回答があった。

## 所感

原子力専攻の学生とシニアの考え方は基本的にベクトルが合っている。しかし学生は成長途上にあるため、シニアの知識や経験を伝え、一般社会の真つ当な考え方を伝えて、学生の成長を促し、背中を後押しして、自分で考え判断できる能力を育てることが重要である。従って原子力の幹部候補生や中軸となる人材との対話は欠かせない。また他の専門分野の学生や一般の方との対話も別メニューで並行して実施するのが望ましい。

以上